

説教「つながっていなさい」

(出エジプト記 19 章 1-6 節 ヨハネによる福音書 15 章 1-11 節)

2022 年 5 月 15 日

日本基督教団仙川教会

大串肇牧師

前回の「良い羊飼い」の比喻と同じく、ここは有名な「ぶどうの木」の譬えです。この譬え話は実はイエスの十字架の死と深い関係がございます。イエスは十字架の死の直前に弟子たちに語りました。告別の説教が、ヨハネ福音書に記されています。「良い羊飼い」の話も、今日の話もその別れの説教の中で語られました。ぶどうの木の譬えは 2 つあります。イエスはこう語りました：

「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である」(ヨハネ 15 章 1 節)。

「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ…」(同 5 節)

2 つの譬えのちょうど真ん中に「わたしにつながっていなさい」という教えが語られています(4 節)。これがメッセージの中心です。十字架によってイエスとの地上での交わりは絶えてしまいます。しかしイエスとの交わりにとどまること、イエスにつながっていることを弟子たちに説いたのです。

「ぶどうの木」や「ぶどう畑」の比喻は、旧約時代から使われている比喻です。たいていはイスラエルの民を表しています(イザヤ書 5:1 以下参照)。しかし 1 節では、イエス自身がぶどうの木であるほかに、ぶどうの木を整え、育む農夫がいることが明らかにされています。この農夫こそ、父なる神が喩えられているのです。イエスは主役のようなようですが、本当の主役は実は父なる神なのです。ですから、父なる神が遣わした唯一の子こそイエスであり、イエスが「まことの」ぶどうの木と言われている所以です。イエス以外に救い主はいません。こういう意味が込められています。こうして父も子もしっかりとつながっている。その親しい交わりがぶどうの木と農夫の関係に喩えられています。

そういう意味で、2 番目の「ぶどうの木」の譬えも 1 節の内容を土台にして語られています。つまり、今度は、イエスと弟子たち、あるいはわたしたちとの関係が、ぶどうの木とその枝との関係に喩えられているのです。

この箇所を、新約原文を直訳すると、こうなります。

15章5節「わたしはぶどうの木、あなたたちはその枝である。わたしのうちにとどまり、わたしがあなたにとどまっている者は、多くの実りをもたらす」

枝が木の幹から離れてしまえば腐ってしまうようにわたしたちが豊かに実を結ぶには、イエスという木の幹にしっかりとつながっている必要があります。「イエスにつながっている」とはどういうことなのでしょう。実は「つながる」という言葉は「とどまる」と訳されている言葉と全く同じ言葉が用いられています。わずか、11節までに10回も繰り返されています。「わたしの愛にとどまりなさい」（9節）。また、「わたしの掟を守るなら、わたしの愛にとどまっていることになる」（10節）と。イエスにつながることとイエスの愛に留まることはまったく同じ意味です。豊かに実りをつぶとは、わたしたちも互いに愛することなのです。

わたしのうちにとどまり、わたしがあなたにとどまっている者は、多くの実りをもたらす。

イエスが共にいてくださるとは未来形ではなく、現在形で書かれています。イエスがわたしたちの中にとどまってくくださるから、わたしたちもイエスのうちにとどまるのです。ここでイエスの洗足の話の思い起こさせられます（13章）。イエスが弟子たちの足を洗ったように、わたしたちも他者に仕えるように招かれています。イエスは愛の模範を示されました。しかし同時に、イエスは既にわたしたち全ての人の足を洗って下ったことも事実なのです。この愛と赦しこそ、十字架であり、神の愛の奉仕はわたしたちが互いの足を洗うことよりも先行しているのです。

「わたしにつながっていなさい」「とどまっていなさい」という言葉は恵みへの招きです。キリストがわたしたちのうちにいるからこそ、わたしたちにも豊かな愛の実りをつぶ希望があるのです。わたしたちひとり一人は小さな枝に過ぎません。しかし、キリストから離れては朽ちて枯れるだけです。イエスにつながっていなさい。イエスの愛のうちにとどまりなさい。どんな小さな奉仕の業も神は喜んでくださり、どんな祈りも神は聞いて下さるのです。